

# 養育里親

～もうひとつの家族～

27

坂口 伊都

## 家で暮らすということ

これまで紆余曲折しながら里子と生活をし、それはまるで細い蜘蛛の糸の上を歩いているような日々でした。結論から言うと、里子と離れて暮らしています。里子と離れたかったわけではありませんが、このまま生活を続けていることが誰にとってもプラスに働かないということが透けて見えてきました。

何度も繰り返し、一緒に暮らし続ける方法はないか探し続け、里子、家族、支援者達と話し合いを重ね、できる事はしてきました。里子自身もいけないとわかっていることを繰り返したいわけではなく、自分をコントロールすることが難しくなり、しないとられない状況に陥ってい

るように見えました。それは、思春期という年齢やこの子の障がい特性も深く関係しているのだと思います。

離れた理由の一つに里子の行動問題を繰り返し続けることを止める狙いがありました。里子はいろいろなモノを取っては隠すという行動があり、家の中からできるだけ刺激になるモノを見えない場所に移し、金銭を含めて物の管理もできる限りしました。里子に禁止することばかりが増えないように、了解できる範囲を設けて里子に伝えるようにしました。それでも、家庭でできることの限界があります。日常の溢れた物を全てなくすことはできませんし、大人の目が届かない部分も多く、家の中から見覚えのないモノがいろいろと出てきました。そうすると、これはどうしたのかを里子に確かめなければなら

なくなり、繰り返される行動問題にばかり目が奪われるようになっていくようでした。

モノ以外では、里子が嫌だと思いと逃げたり、裏口からそっと出ていなくなっていました。そこで、散歩に行きたいなら行ってかまわないけど、倒れたら困るから水筒を持って行くように伝えました。里子も「散歩、行ってくる」と言い水筒を持って出かけ、水筒のお茶を飲んで帰ってきますが、そのすぐ後に裏口のサンダルを履いて姿を消してしまうことが続き、里子に「隠れてほしい」という思いが中核にあるように見えました。ある日は、午前9時頃から何も持たずにいなくなり、最高気温が38℃の猛暑日に熱中症で倒れたらと心配し、警察に捜索願を依頼しました。里子は午後2時頃に見つかり、警察に無事見つかったと電話している姿を里子に見せ、大きな事になっていると説明しましたが、ご飯を食べた後にまた裏口からいなくなっていました。

隠れてする時には、何か家にモノが持ち込まれたりします。隠れてするという行動には、自分の思い通りにできているという優越感があるのだろーと思えます。歩ける範囲をひたすら歩いているようでしたが、電車に乗ったらもうどこにいるか検討もつかなくなり、この子を守ることの限界を強く感じました。

里子の行動を見ていると他の場所ではモノを取って隠していないので「家」そのものが、この子にとっての刺激になって行動を誘発しているようでした。誰のモノであるか特定されないモノが転がっていて、それを自分だけが知っている場所に隠し、もっと自分のモノにしたい、もっと欲しい、自分が思うように出かけてお金も自由に使うことで優越感が増すという感じでしょうか。その一方で、坂口家で生活を続けたいという思いも強く持っています。家で生活を維持したいのなら、優越感を得たい行動をセーブしてい

かなければ続きません。両者を同時にしようとする行動は、破綻に向かっていきました。

改めて家庭は枠を作ることが難しい場所なのだ痛感しました。里子も隠れてしている行動は、いけない事だと理解しているので、隠したモノが見つかる度、行動を止められない自分に罪悪感を抱えていきます。そうすることで、ますます不安定になり、その行動が加速され、里子自身が追い込まれているようでした。

これまで一緒に遊びに出かけたり、外食をしたり、家族旅行もし、楽しかった思い出も一緒に作ってきました。里子の周りには、里子のいいところも悪いところも受け止め、大事にしてくれる人々がいました。そのことは、里子自身も実感が持っているといます。

しかし、里子にはいろいろな体験をしても「満足する」感じがなく、常に次何をするか考えているように見えました。何か新たな体験をさせてあげたいが、それを体験して知ること、次の行動問題につながるのだろーと予測が立つと腰が引けてしまいます。スマートフォンが欲しいと言われた時も持たせる勇氣はありませんでした。いずれ高校生になったら持たせてやりたいが、どうやったらできるのかいくら考えてもいい答えが見つかりません。枠を持つことが難しい家にいることで、本来させてあげられることもできなくなって、それも里子にとってプラスにならない要素だと悩みました。



## 家族の状態

里子の行動問題が止まらなくなっていくと、家族一人ひとりに疲労感が溜り家族間も軋み始めます。今日、こんな事があつたと報告するだけでも空気が重くなっていきました。夫は仕事から帰ってくる時間が遅く、ゆっくり話す時間も取れず、シフト制で定休ではありません。娘も家を空ける時間が多く、里子と里母が二人になる時間が増え、何か起これば私が一人で対応しなければならないという感覚になっていきました。また、夫も娘も口にはしませんが、ストレスフルになっている感じが伝わってきます。家族が言葉で不満をぶつけてこないことが、余計に息苦しく感じ、追いつめられる感覚に陥りました。私の肩に家族成員をどう守るかすべて乗っかってきているようでした。

昨年度までは、学校の担任を始めとする方々に支えてもらっていました。学校での様子も考慮しながら家庭での様子を把握し、里子の状態を考え、将来この子が社会の中で生きていくために身に着けて欲しい行動を少しずつ育てていくために何をしていくかを一緒に考えてくれました。残念ながら、今年度は学校との歯車が絡み合わずにギシギシ鳴っているようで、何度訴えかけても届かず、同じ子を見ている感覚になれませんでした。障害児サービスの支援者の方々は昨年度同様足並みを揃えてくれていましたが、子どもがいる場所の主力である学校と意思疎通ができない事は、大きな痛手になりました。児童相談所の方と連絡も取りあってきましたが、気持的に「孤立感」を深めるには十分でした。

昨年度は、里父母を含めて、里子に関わる支援者が集まりケース会議を開き、いつそれがあるか里子も知っていました。不思議なのですが、この子は隠れて優越感を得ようとしています、悪いことだともわかっているからか、大人が皆それ

を知っている状況になると落ち着きました。ケース会議を開くということを知り、自分がどこで何をしても皆が知っていると思うと隠す必要がなくなるからか、目覚ましく落ち着きました。ケース会議には、子どもの行動に困った時に開くものという認識があると思いますが、この子の安定のためには、あなたのいい所も悪い所も皆で話す時間を定期的に持ち、それを知ることが必要だったのだと感じます。そこを詰めることができなかったのも事実ですし、昨年度末に落ち着いていたからこそ、何とかならなかったのかと自分を責める感覚がつきまといます。

チームがチームでなくなり機能しなくなると、私一人が対応しなければならないというプレッシャーが大きくなりました。電車に乗って帰っているとだんだんと動悸し始めました。最寄り駅が近づいてくると起きると気づきました。ついに身体に症状が出るようになっていて、自身の状態がかなり悪いことを認識しました。その頃は、里子の行動に一人で対応して、それがやっと終わったかと思った矢先にまたわけのわからないモノが見つかる、いなくなる、暴れる等の問題が起こると私自身も家で安心できる状態ではなくなっていました。この状況が続くことは、誰にとってもプラスではないのでしょうか。

この子は、損得よりも手前の「快」「不快」に反応しているように見えます。だから里子が動けば動くほど、この子の思いとは逆の方向に事態が向かってしまいます。その中、何度も何回もいろいろな対応パターンを考えてみました。そして毎回、「家での養育の難しさ」にぶち当たりました。この子にとって、今の行動を止められず、それをし続けることのデメリットを考えると、わかりやすい枠がある環境がいるのだという所に辿りつきました。

## いなくなつて

児童相談所の担当と何度も話をし、試せることは実行してきましたが、里子と離れる決断をし、その日が訪れました。里父が里子を児童相談所に連れて行き、家に帰れないとわかると激しく暴れだし、落ち着くまでかなりの時間がかかりました。

里子と離れたからといって、皆の気持ちが楽になるわけではありません。悲しいのか辛いのか、何と表現したらいいかわからない、今までに経験したことがない感情が襲ってきました。家にいることがしんどくて夫と娘と3人で気分転換に外で食事をすることにしましたが、出かけた先で、「ここ里子と一緒にいったことがある」「あっ、ここも里子と来た」という話にばかりなります。自分たちの生活圏内で、里子と一緒にいない場所などないのです。いろいろな時間を共に過ごしてきたことを再確認します。

生活の中でも里子がいなくなったことを実感する瞬間があります。洗濯物を干しても食事の用意をしても分量が減ったなど感じ、やる気が起こってきません。里子がいるから、張り切って晩御飯を作っていたのです。

何度もやり直す方法はないのか探して、これまでの行動の止まらなさを思い出し、己の感傷で動いてはいけないのだと思い返し、その繰り返しが終わることなく続いています。

## 終わりに

里子との暮らしは何だったのか、一緒に暮らして良かったのか、他に方法はなかったのか等の疑問がずっと私の中に渦巻いています。その中でも、確かなことはあるように思います。その一つは、ここでの暮らしの中で里子は大事にされる経験を積みました。家族だけでなく、学校の先生、用務員さん、放課後等デイサービスやガイドヘルパーの皆さんが、この子のことをかわいがってくれました。それは、この子の中で大きな経験として残るのだらうと思います。

そして、家庭という場所では守れないことがあるという現実も知りました。里親家庭には鳥瞰図的に観察をし、何が起きているか分析をし、今後の方針を共に考えてくれるスーパーバイザー(SV)の存在が必要です。そして、里親ではない立場で、連携が上手く回っていない場所にアプローチをし、違う風を吹かせて欲しいとも思います。

子どもにとって社会的養護という暮らす場所の選択肢があることが重要だと改めて感じています。何が正解なのか全くわかりませんが、許されるのなら、一緒に食事に出かけられる存在として細く長く里子を支える一人であり続けられたらと願っています。

